人と環境 Vol. 11: 1－7 (2018)

【論　文】

大阪信愛学院短期大学『現代と女性』講座「聖母をたたえる集い」における女子学生のキリスト教への関心

フロール・サンティアゴ
Flor Santiago*

大阪信愛学院短期大学

Human and Environment Vol. 11 (2018)

Interest of Female College Students in Christianity on the Occasion of a Lecture Held at Osaka Shin-Ai College, entitled “Gendai-to-Josei (Women in the Modern Age)”

Flor Santiago
Osaka Shin-Ai College, Japan

Abstract. Given the great opportunity to proclaim the Gospel to female college students, I wondered about the following question: Is the Gospel of Christ (which the Catholic Church has announced to the whole world throughout the centuries) able to reach the hearts of today’s young Japanese women or is it a contradiction to be Christian and Japanese at the same time, as stated in Endo Shusaku's "Awanai Youfuku 合わない洋服" (unfitting western clothing) essay?　With the desire to have some enlightenment about this issue, as well as to have a general idea about how women today look at religion or react to the direct announcement of the "Word of Salvation", I asked all the students of Osaka Shin-Ai College to produce a written reflection on the lecture held on the occasion of the "Gathering to praise the Blessed Virgin Mary". From the content of those reflections it was made clear that Christianity puts before us the fundamental problem of the meaning of life; that God, the Blessed Virgin Mary, and the Holy Scriptures awake in our hearts many other important questions; and that there is an increasing interest in the inner connection between sex and life within human relationships.

Keywords：Blessed Virgin Mary・Gathering・Word of Salvation・Female College Student

１．はじめに

カトリックミッション校､大阪信愛学院短期大学では、建学の精神を考える総合教育科目として開講されている『現代と女性』講座において、毎年５月「聖母マリアをたたえる」祭儀が行われている。しかし、現代社会では宗教に伴う典礼の意味とその興味がなくなっているのが現状である。大阪信愛学院短期大学の学生の大部分がキリスト教の入信の経験がなく未洗者である。そこで、現代人の実生活を照らすイエス・キリストの福音（良い便り）を直接告げた方が学生に解かりやすく「救いの言葉」[1] が豊かに宣べ伝えることが出来ると考えた。

そこで、毎年行われている「聖母をたたえて」の内

*大阪信愛学院短期大学
〒538-0053　大阪市鶴見区鶴見 6-2-28

受付：2018 年 2 月 7 日　受理：2018 年 3 月 30 日

©2018 大阪信愛学院短期大学

容を保ちながら、集いの形式と話し方を変えることによって、学生の心にどのような反応があるのかを測るためにも、学生に感想文を書いてもらうことにした。

現代社会において、人々の価値観は日本を問わずグローバル化されている。この中で非神聖化と言われるものも強く影響されている。本稿では、この現象の歴史的な原因に触れないが、現代人にとって宗教よりも科学、神様の助けよりも人間の動力、祈りよりも仕事、人生の深い意義の探求よりも日常生活の問題解決の方が実利的で大事だと思われてきた。

確かに人類の進歩は明らかであるが、この世界的な多様性の価値観の中に生きる人々にとって、自分の存在、自分の使命が見えなくなっている現象がある。寂しさ，空しさ、不満や切望などは少なくない。内面的にこういう悲しみを経験している多くの人々にとって、家庭や仕事の場で人間関係の難しさなどは残念ながら、生きていくために困難な元となっている。

しかし、どんな時代でも次の聖書の言葉が実現されている。「子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるためでした。」[2]

マリア様の時代の人々も現代社会と同じように、その「死の恐れ」のために圧迫されて苦しんでいた。しかし、マリア様は天使の告げた神の言葉を聞いて、それを完全に受け入れ、このことを通して、この世に救いを迎え導き入れた。

今回、マリア様のその模範的な態度に励まされて、わたくしは現代人にその救いが訪れることを願いながら、天使の務めを果たし、キリスト教の良い便りを告げたいと望み以下の 8 つのことを話そうと計画した。①素晴らしい天地創造をはじめ、②悪魔の働きによって神様との関係を切った人間の罪、③罪の状態から永遠のいのちを与えて下さる神様からの約束、④すべての人に対する神様の無条件の愛、⑤罪人の為に死んで甦られたイエス・キリストの恵み、⑥信仰と洗礼によって新しくなる人間、⑦そして相互愛と一致を示していく教会、⑧聖霊による交わり、などの内容を計画し提示した。

また、このような聖書の言葉や教会の教えは、現代の日本の女性にどのように響くかを知る目的で、話しを聴き終えたあとの学生に感想文を書いてもらった。その目的として学生の皆さんから教えてもらいたかったのは、教会が全世界に伝えてきたキリストの福音は現代の日本の女性の心に響くのか、或いは、「日本人でありながらキリスト教徒である矛盾」（「合わない洋服」）といった遠藤[3]のとおりなのか、など現代の学生の宗教に関する意識の一端を明らかにしたいという思いもあった。

司式　サンティアゴ神父様
日時　平成 29 年 5 月 10 日（水）午後 3 時～
場所　学院講堂

聖母をたたえて
―ことばの祭儀―

入祭の歌	89　「あめのきさき」(1.2)	P. 84
集会祈願		
神父のお話①		
聖書朗読	創世記 3 章 1 節～6 節	
神父のお話②		
福音朗読	ルカ 1 章 30～33 節、38 節	
神父のお話③		
主の祈り		
結びの祈り		
祝　福		
閉祭の歌	88　うるわしくも（1・2）	P. 83

図１　式次第

２．研究方法

先の述べたように、大阪信愛学院短期大学では建学の精神に基づく総合教育科目として「現代と女性」講座が設けられ、週 1 回開講されている。この講座では様々なプログラムの中で建学の精神について学生自らが学び、考えることを目的としている。「聖母をたたえる」祭儀はその一環として行われている。

「聖母をたたえる」祭儀の式次第を図 1 に示す。式次第に沿って神父の話①では天地創造、「男と女に造られた…」人間の創造（創造の神秘）、②ではエバと悪魔の対話（罪の神秘）、マリアと大天使ガブリエルの対話（受肉の神秘）、③ではキリストの死と復活、信じる人の中に入る聖霊の働き、教会の使命（救いの神秘）を中心にカテケイジス（要理教育）をした。

当日の参加学生等は、子ども教育学科学生：141 名（1・2 回生）、看護学科学生：165 名（1・2 回生）であった（3 回生は実習の為に受講せず）。教職員は 30 名であった（3 回生の実習関係教員を除く）。

なお、感想文は記憶の新しいうちに書いてもらうために、提出期限を翌日の 16：00 までとし、回収した。

３．話の内容

A. 話の構造

新しいエバである聖母マリアに与えられた、大天使ガブリエルからのお告げである「救いの言葉」[1] を用いた。その流れは使徒信条[4]の構造に沿って行った。

話①　天地の創造、「男と女を造られた…」人間の創造（創造の神秘）
私は信じます。
唯一の神、全能の父、
天と地、見えるもの、見えないもの、
すべてのものの造り主を。

話②　エバと悪魔の対話（罪の神秘）、マリアと大天使ガブリエルの対話（受肉の神秘）
わたしは信じます。唯一の主イエス・キリストを。
主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、
神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、
造られることなく生まれ、父と一体。
すべては主によって造られました。
主は、わたしたち人類のため、
わたしたちの救いのために天からくだり、
聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、
人となられました。

話③　キリストの死と復活、信じる人の中に入る聖霊の働き、教会の使命（救いの神秘）
ポンティオ・ピラトのもとで、
わたしたちのために十字架につけられ、
苦しみを受け、葬られ、
聖書にあるとおり三日目に復活し、
天に昇り、父の右の座に着いておられます。
主は、生者と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。
その国はおわることがありません。
わたしは信じます。
主であり、いのちの与え主である聖霊を。
聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、
栄光を受け、また予言者をとおして語られました。
わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。
罪のゆるしをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。アーメン。

B. 話のすすめ方

話の内容は、旧約聖書、エバと悪魔（罪の神秘）[5] の対話、新約聖書、聖母マリアと大天使ガブリエル（受肉の神秘）[6] の対話の箇所を使った。現代に生きる女性に真の幸せを与えることのできる唯一の救い主であるイエス・キリストを直接に紹介し、「今」「ここで」「この場所」（大阪信愛学院講堂）において、良い便りを告げることは、聞く人にその救いが行われるという確信を持ちながら福音を宣べ伝え、また、聞く人に間違った聞き方がないために、次の(1)(2)の二つの点に注意をはらって話をさせて頂いた。

(1) 律法主義と道徳主義

確かにキリスト教の教えの中で善と悪をわきまえるための道徳が現われました。しかし、キリスト教は道徳ではありません。多くの人は宗教というものはただ、正しい生き方を教えるものだと考え、その実行はその人の動力にかかっていると思い込んでいるようです。この考えに基づけば、聖書の話にしても教会の教えにしても、それは結局「してはいけない」ことと「しなければならない」ことに縛られてしまいます。ここには、イエス・キリストの復活の良い便りはどこにも見られなくなります。聞く側がこのような考え方を持っていれば教会に行って話を聞くと「良い人になりなさい」と言われるだろうという先入観で聞くことになり、良い便りは良い便りとして聞こえてきません。

聖パウロが書いた手紙の中で、よくこれについて話されています。「神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたことになります。」[7]

今回の集いを明確にするため、「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪びとを招いて悔い改めさせるためである。」[8] と言った、イエスの考えを伝える必要があると思った。

マリア様は、すべては自分の努力にかかっているという律法主義的な考え方ではなく、「お言葉どおり、この身に成りますように。」[6] という態度で天使からのお告げを聞きましたので神の母となられました。

(2)合理主義と主知主義

この点についても先ず、キリスト教では信仰と理性の関係において矛盾がないことを述べなければなりません。しかし、キリスト教はただ、いくつかの真理を

教える宗教ではありません。キリスト教のお蔭で多くのことが明らかになっただけではなく、キリスト御自身、真理であることは確かですが、「キリストは生きている神の子」[9] です。キリスト教では真理を習うよりも真理である方と出会うのです。

人々の救いよりも、ただの知識をもたらすものとなったキリスト教は最早、キリスト教ではないと思っています。合理主義的な考え方に基づいていれば、キリスト教は、ただの人生の知識や教養のレベルにとどまってしまい、学校においては一つの科目となってしまいます。そして、こうゆう耳で聖書や教会の話を聞くようになれば、誰でも「覚えなければならない」というストレスになってしまいます。

そのために集いの流れの中で、わたしが（筆者）子どもの頃、カトリック学校の体験をそのまま話させていただいた。驚くことに感想文の中にこれを感謝する学生もいた。

マリア様も、すべてを理解しなければならないような合理主義的な考え方ではなく、聞いたことをそのまま心に留め、思いめぐらしたので[10] 神の知恵の座となられました。

C. 話の内容

以上B(1)(2)を裏打ちとしてA話①②③の三つの部分に分けて話を進めた。ここでは話の内容のポイントを示したいと思う。これらの理解を進める目的で聖書朗読に先立ちその概要を簡単に説明し、次いで学生による聖書朗読を行った。

話①天地の創造と人間の創造

a. 神様は無からすべてをお創りになりました。

b. 神様は愛と知恵をもって、見えるものと見えないものをお創りになりました。すなわち、造られたすべてのものは神様の愛と知恵を語ります。

見えるもの： 惑星、地球、空、太陽、月、星、山、海、谷、川、動物、植物、等
見えないもの： 時間、空間、天使、大天使、のちに悪魔になった一番美しい天使、等

c. 神様は御自分の似姿にかたどって人間をお創りになりました。

神様は父と子と聖霊（三位一体）の愛の共同体で新しい命を生み出す、男と女の関係の中に、聖なるものとして性をお創りになりました。

第一朗読を理解し易くするための神父の説明（サンティアゴ）

聖書はすべて神の愛や知恵を語っているならば、あるいは神様は人間関係を制覇するならば、あるいは神様みずから御自分の神秘を現わすならば、どうして苦しみ、恨み、妬み、裏切り、離婚、堕胎、不正、などの悪があるのでしょうか。どうして死というものがあるのでしょうか。それについて聖書の言葉を聞きましょう。

第一朗読：創世記３・１－６（学生による聖書朗読）

主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

話②悪の神秘と救いの神秘（神父の話　サンティアゴ）

a. エバともと天使だった悪魔との対話

b. エバ（わたしたち）と悪魔の対話（現代）

c. エバ（わたしたち）が悪魔の言ったことを信じてしまった結果：恐れ、不満、不幸、愛のない世界があらわれた。等

d. 神様は罪びとの、わたしたちをそのまま愛して下さっています。ですから、わたしたちを助けるために救いの計画を準備してくださいました。

第二朗読を理解し易くするための神父の説明（サンティアゴ）

マリア様は救いの計画の中で一番大切な人物です。マリア様は悪魔の嘘に耳を貸しませんでした。マリア様は新しいエバとして大天使ガブリエルが告げた神の御言葉を信じました。その対話の内容は次の聖書の言葉で宣言されます。

第二朗読：ルカ１・30－33、38（学生による聖書朗読）

すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

③私たちの主イエス・キリストとイエス・キリストによる新しい命（神父の話：サンティアゴ）

a. マリア様はお告げの言葉を信じて「お言葉通りこの身になりますように」と言って神の母となりました。（受肉の神秘）

b. 神の子、マリアの子イエス様はわたしたちへの愛のゆえに、わたしたちの罪を背負って十字架につけられました。（受難の神秘）

c. イエス様は悪の力を滅ぼして死者の内から甦られました。（復活の神秘）

d. イエス様はわたしたちを三位一体の愛の関係に導き入れるために天に昇られました。（昇天の神秘）

e. ここに遣わされたサンティアゴ（天使）と救いの言葉を聞く学生の皆さん（マリア）との対話は今、この所に行われていること、即ち「この聖書の言葉は、今日あなた方が耳にしたとき、実現した。」[11] とイエス様がおっしゃったとおりです。よい便りを聞く、その瞬間にそれを信じる人には宣べられた、救いの神秘が実現されます。

f. マリア様のように「お言葉通りこの身になりますように」[6] と心の中でいう人に、誰にでも、神の子としての命がその人の中に生まれます。聖霊の働きです。このように、教会は聖霊の働きによって生まれます。即ち、本当の意味での相互の愛が生まれます。

g. カトリック教会はマリア様のように母です。教会の中に聖霊が働きますので、教会は母として言葉と秘跡によって、わたしたちの中にイエス・キリストを生み、育ち、「成熟した人間となり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。」[12] 体の復活、永遠の命の豊かさまでわたしたちは導かれるのです。この豊かさは敵を愛するキリストです。

4．結果と考察

学生の感想文（306 名）を読んで、先ず報告しなければならないのは、学生の感じる多くの興味や疑問点からイエス・キリストが本当に生きておられ、聖霊によって国や文化などを超えて、人々の心に語っていらっしゃるという事が分かり、多くの学生は神様にそのまま愛されているということを感じていたことであり、福音宣教の大切さを示すしるしであると思う。

考察に当たって、その感想内容を整理すると多くの点について 1 つ 1 つを応える必要性があると感じた。本稿では、『話の評価』と『興味を示したところ』という項目に絞り考察した。

表 1 に『話の評価』の回答数を示す。図 2 に両学科を合わせた回答数のパーセントを示す。

話の評価から「印象に残ったものがあった」と答えたのは、122 名（39.9%）であった。次に多かったのは「解かりやすかった」「良かった」が 63 名（20.6%）であった。「興味深いものでした」が、55 名（18.0%）で、「新しいことを学んだ」は 50 名（16.3%）であった。

この結果から推測されるのは、日常生活の中でキリスト教にあまり親しみのない学生が、集いの方法と話の内容から、一人ひとりの生活を照らすものであったことと考えられる。また、話を聞く学生の耳が充分に開かれていたことも感じた。

信愛教育である建学の精神を深めるために、本講座が開講されているが、日頃の教職員の熱意と努力もここで伺うことが出来た。

「解からなかった」「難しかった」「評価なし」は 16 名（5.2%）であり、この結果を見ると、大半の学生が未洗者であることを考えると驚くほど少ない数である。

表 1　話の評価（人）

	子ども教育学科	看護学科	合　計
印象に残ったものがあった	57	65	122 (39.9%)
解かりやすかった・良かった	27	36	63 (20.9%)
興味深いものでした	28	27	55 (18.0%)
新しいことを学んだ	22	28	50 (16.3%)
解らなかった・難しかった・評価なし	7	9	16 (5.2%)
合　計	141	165	306

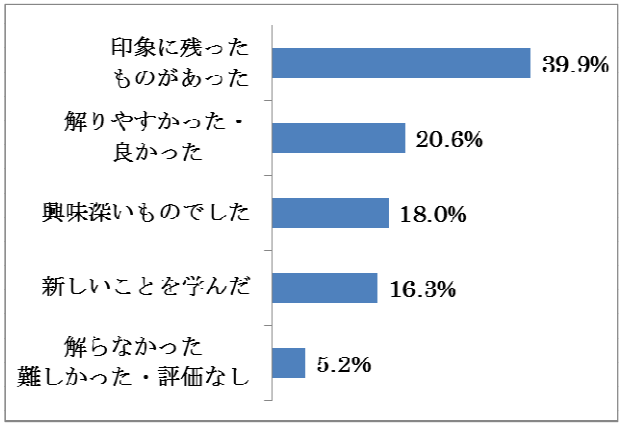

図 2　話の評価

この応えから、キリスト教や聖書の言葉は、現代社会の大部分の女性の心に届くものだと思った。

この集いで自分の心の中にある疑問の答えを見出し、又これまでの人生で考えもしなかった様々な思いが起こされた。こういう思いを次に挙げる『興味を示したところ』に整理されている。

表 2 は話の内容から、『興味を示したところ』の回答数を示す。図 3 は両学科を合わせた回答数のパーセントを示す。

「人生の意義」と応えた人は、100 名（32.7%）で最も多かった。この「人生の意義」とは、「私はどこから来たのか、どこへ行くのか、どうして苦しみがあるのか」という疑問と問題を考える広いテーマでもある。物質主義の中で生きている現代人であっても、また、どんな時代に生きている人であっても、自分の存在について根本的に問題を解決しない限り落ち着かない。仕事や学問や社会活動などで頑張っていても、或は現実から逃避していても自分が誰だと分からなければ、生活そのものは無意味になってしまう。

聖アウグスティヌスは「あなたは私たちを、ご自分に向けてお造りになりました。ですから私たちの心はあなたの内に憩うまで安らぎをえることができないのです。」[13] と言っている。すべての人に、その「人生の意義」を与えることのできるイエス・キリストは、福音を伝える使命を教会に与えられた。ですから教会はその答えを持っている。

次に応えたのは、「キリスト教」54 名（17.6%）であった。ここでは、“キリスト教は何ですか”、“十字架はどんな意味がありますか”、“キリストとは誰ですか”、“私とイエス・キリストとどんな関係がありますか”、“カトリック教会は何ですか” などの疑問があった。中には、「私は宗教にこれと言って興味がなくキリスト教は全く知りませんでした。でも神父様は冗談をまじえてお話をして下さったので、すんなり聞くことができたし興味深い話が多く、キリスト教に興味を持つことができました。」というような感想が多くあった。「人間となったイエス・キリストこそは人間が誰であるかを示してくださったのです。」[14]

「神様　マリア様　聖書」と応えたのは 49 名（16.0%）であった。“神様は存在しますか”、“神様はすべてを造りましたか”、“マリア様は誰ですか”、“私は神様を信じているのか”、“神様は私を愛しているのか”、“聖書は私と関係があるのか” という疑問は人間の心にあること自体は驚きではないが、自分の心にあるその思いに気が付く人間は少ない。しかし、学生はよくこのテーマに興味を示した。このような意識に到達するためにはカトリック学校の精神が培われているからであると思った。

表 2　興味を示したところ（人）

	子ども教育学科	看護学科	合　計
人生の意義	47	53	100 (32.7%)
キリスト教	26	28	54 (17.6%)
神様・マリア様・聖書	26	23	49 (16.0%)
性と命	19	28	47 (15.4%)
人間関係	13	18	31 (10.1%)
特にありません	10	15	25 (8.2%)
合　計	141	165	306

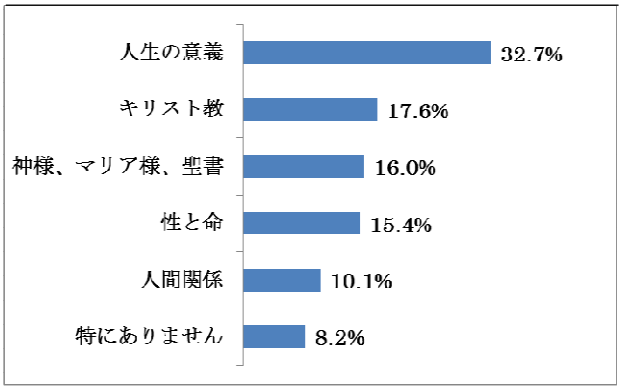

図 3　興味を示したところ

「性と命」について応えたのは 47 名（15.4%）であった。この「性と命」について学生は、“どうして性別があるのでしょうか”、“女性、又は、母性の本質は何ですか”、“性の意味は何ですか” という問題に対する興味を表していた。「性と命」について、多様性の中に生きている現代人の当然の疑問ではないかと思った。このテーマを深めるには日本司教団のメッセージとして、ーいのちへのまなざしー[15] の書物が参考になると思う。

「性と命」と深く繋がっている「人間関係」と応えたのは、31 名（10.1%）であった。このテーマも広い領域であるが “どうして人間関係は困難なものですか”、“どんな人間関係をつくればいいですか”、“どうして人間の中に恐れがあるのか”、“人間関係はどこが大切ですか”、“どうして人を赦せないのでしょうか” などであった。

この集いの内容に特に興味を示さなかった人、すなわち「特にありません」は 25 名（8.2%）であった。全体の割合から見て 8%の学生が応えたものであるが、僅かな値であり、大阪信愛学院短期大学におけるカトリック教育は、福音宣教の場になっているのだと思った。

なお、図 2 の『興味を示したところ』で「性と命」では看護学科と子ども教育学科の学生を比較すると、看護学科の方がやや多かったのはおそらく直接に命と係わる看護の特性を現わすものと思った。それに対して子ども教育学科は全体的に人数が少ないにもかかわらず「神様、マリア様、聖書」のところだけは看護学科よりも多かった。それもおそらく子ども教育学科の学生は、カトリック幼稚園での実習や就職先においてこの項目については知識が必要だと理解しているからだと思った。

５．まとめ

女子短期大学の学生を対象として宣教の機会が与えられた。この機会を活用して、日本女性の心に福音がどの程度届くのかを知る目的でカテケイジス終了後に感想文を求め、分析した。結果は以下のごとくである。

① 話の内容からキリスト教は 1 人ひとりの生活を照らすものであった。
② 人生の意義を考えさせるものであった。
③ キリスト教に興味をもつことが出来た。
④ 「神様、マリア様、聖書」については、人間の心にある疑問を呼び起こすものである。
⑤ 「性と命」が深く繋がっている人間関係に興味を示した。

多くの学生は神様にそのまま愛されているということを感じていた事はイエス・キリストが生きておられ、聖霊によって国や文化などを超えて、人々の心に語っておられることが分かり、福音宣教の大切さを示すものであった。

謝辞

この度、「現代と女性」講座に招かれ宣教の機会が与えられましたことを、大阪信愛学院学院長・短期大学教授　縄田 詠子先生（元：理事長）、大阪信愛学院短期大学カトリック教育部長・教授　宮﨑康江先生に心から御礼と感謝を申し上げます。又、本稿をまとめるに当たり助言をくださった本講座の委員長　佐嶋陽子先生に深謝致します。

引用文献

[1] 聖書　新共同訳―旧約聖書続編つき　日本聖書協会、使徒言行録、13：26、（新）239 頁（1988）
[2] 聖書　同書　ヘブライ、2・14－15、（新）403 頁
[3] 遠藤周作：「合わない洋服」遠藤周作文学論集宗教編（加藤宗哉・富岡幸一郎編）．講談社（2009）
[4] 日本カトリック司教会議認可：使徒信条　2 月（2004）
[5] 聖書　同書　創世記、3・1－6、（旧）3－4 頁
[6] 聖書　同書　ルカ、1・30－33、38、（新）100 頁
[7] 聖書　同書　ロマ、4・13－14、（新）278 頁
[8] 聖書　同書　ルカ、5・31－32、（新）111 頁
[9] 聖書　同書　マタイ、16・16、（新）32 頁
[10] 聖書　同書　ルカ、2・51b、（新）105 頁
[11] 聖書　同書　ルカ、4・21、（新）108 頁
[12] 聖書　同書　エフェソ、4・13　（新）356 頁
[13] 聖アウグスティヌス　告白　1、1、1：CCL27　1 PL661
[14] 第二バチカン公会議 gaudium et spes, n.22
[15] いのちへのまなざし―21 世紀への司教団メッセージー．カトリック中央協議会　２月（2001）

【要旨】

この度、女子短期大学生に宣教の機会を与えられた。この宣教の機会に合わせて私が理解したかったことは教会が全世界に伝えてきた、キリストの福音は現代の若い日本女性の心にどの様に響くのか、あるいは遠藤周作の「日本人でありながらキリスト教徒である矛盾」（合わない洋服）が当てはまるのかなど、現代の学生の宗教に関する意識の一端を明らかにする目的で大阪府下カトリック系女子短期大学の聖母マリアをたたえる集いで「救いの言葉」を女子学生により理解し易い言葉で宣べ、あわせて、受講学生の心の反応を知るため、学生に当該「集い」の受講感想文を求めた。感想文の内容から、キリスト教は人生の意義を考えさせられるものであり、神様、マリア様、聖書については人間の心にある疑問を呼びおこし、また、性と命が深く繋がっている人間関係において、興味を示した点が明らかになった。

キーワード：聖母マリア・集い・救いの言葉・女子学生

論文集「人と環境」Vol. 11 (2018)
大阪信愛生命環境総合研究所編